

豊かな心をはぐくむ幼児教育

－身近な自然や人とのかかわりを通して－

天理市立福住幼稚園 教諭 島谷 真代

Shimatani Masayo

要 旨

幼児は、生活や遊びの中で様々なものに興味や関心をもち、自らそれらに働きかけ、直接的で具体的な体験を積み重ねていく。すなわち、幼児は豊かな生活体験を通して、自我の形成を図り、ものや人とのかかわり方や豊かな心情、意欲、態度を培っていく。

そこで、身近な自然や人とのかかわりを通して、豊かな心をはぐくむための環境構成や教員の援助の在り方について考察した。

キーワード： 豊かな心、幼児理解、教員の役割、自然や人とのかかわり

1 はじめに

幼児期における教育は、幼稚園と家庭、地域との連携を図りながら、その幼児の生涯にわたる人間形成の基礎を培うことが肝要である。

しかし、幼児を取り巻く環境には、核家族化、少子化、情報化、価値観の多様化など急激な社会の変化の波が押し寄せてきている。その結果、人とのかかわりの希薄さや直接的で具体的な体験不足、また親の子育て不安など、子どもの成長にとってはあまり望ましいとはいえない環境になりつつある。

本園においても、豊かな自然が身近にありながら親子ともにその自然に直接かかわる体験が少なく、また、山間の地域に家々が点在し、限られた人的環境の中で生活が営れているため、人とのかかわりも少なくなりがちになる。そこで、地域の特性を生かした自然を体全体で感じ取ったり、未就園児や地域の方々などとかかわったりすることで、様々な感動体験を積み重ね、豊かな心をはぐくんでいきたい。

2 研究目的

身近な地域の自然や人々とのふれ合いを通して、幼児の生活の場や体験を広げ、豊かな心をはぐくむ保育の在り方を探る。

3 研究方法

- (1) 『豊かな心をはぐくむ幼児教育』についての理論研究
- (2) 研究保育や実践事例を通しての考察

4 研究内容

- (1) 主題のとらえ方

幼稚園、家庭、地域生活の中で、心が揺さぶられる体験を積み重ねていくことは、その体験を通して充実感を味わうことができ、豊かな心をはぐくむことにつながっていくと考えられ、幼児にとってきわ

めて大切なことである。

豊かな心とは、安心できる時間と空間の中で幼児自らが主体的に環境に働きかけ、直接的で具体的な体験を通してはぐくまれていくものであると考える。豊かな心をはぐくむためには、安定した家庭生活、基本的な生活習慣の形成、教員との信頼関係や友達とのかかわりが不可欠である。

本園は、小規模園で、限られた人とかかわりの中で生活しているが、素直で人なつっこい性格の幼児が多い。しかし、その一方で自己主張が強く、大人や友達への依頼心が強いため自分の思い通りにならないと怒ったり、すねたりして集団から逃れようとする姿も見受けられる。

これらのことを踏まえ、まず、教員は、一人一人の幼児の特性や発達の違いをとらえ直し、幼児が、物的・人的環境に主体的にかかわって豊かな心をはぐくむための教員の役割や援助、更に家庭、地域との連携を密にするなどの取組を進める。

下に『豊かな心』が育つ過程を模式的に表した。(図1)

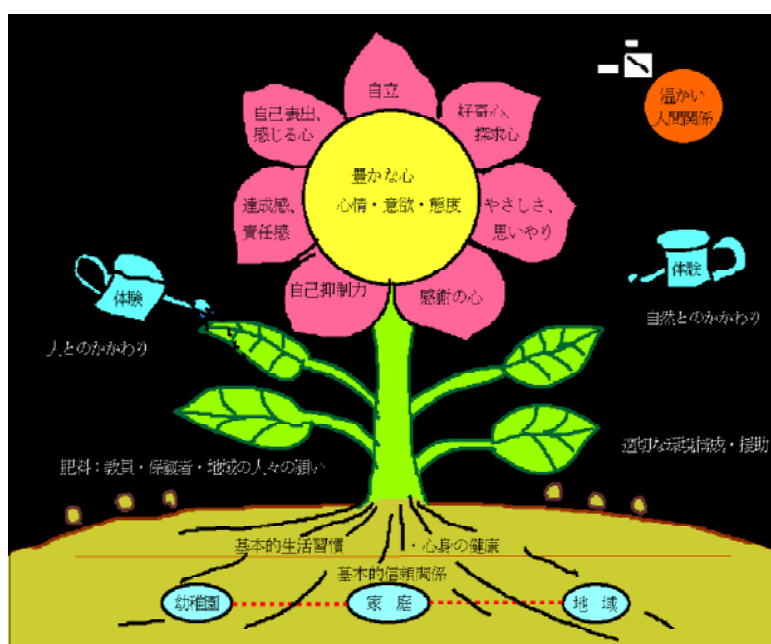


図1 『豊かな心』が育つ過程

(2) 保育実践を通じて

ア 幼児一人一人の発達をみつめて

- 幼児と教員の信頼関係を土台に、基本的生活習慣など、自分のことは自分でしようとする意欲や態度を育てることを目指す。
- 夢中になれる遊びの中で、自分の思いを表出する楽しさを味わい、友達とのかかわりを通じて相手の思いを知ったり、つまずきや葛藤体験をしたり、思いやりの気持ちをもったりできるよう援助していく。

「せんせい、手伝って」「私したろ」「自分でする」
 ○幼児の姿 4、5歳児 4月
 4歳児8名、5歳児2名の少人数、混合学級である。
 進級当初、4歳児は、担任が替わったこともあり、緊張した様子で登園、生活する様子が窺^{うかが}えた。特にこの頃、週初めの持ち物の整理では、自分から進んで整理する幼児やほかのことが気にかかり放りっぱなしの幼児、しようとする気持ちはあるが一人ではなかなかうまくいかず「せん

せい、ここもって」と手伝ってもらうことでやる気を出す幼児など様々な姿がみられた。

また、4歳児にとっては慣れないボタン付きの制服を着用するようになり、登降園時には、ボタンと格闘している幼児、あきらめて遊び出す幼児やボタンを留めていなのに身支度を終えた様子で席についている幼児など様々であった。「ボタンもってるから、引っ張りや」などとボタン留めができるように援助していった。5歳児に「ちょっと助けたって」などと声がけをしていったところ、「私したろ」と方法を教えながら手助けする姿がみられた。

○考察

進級当初は、身支度や持ち物の始末において個人差がみられるが、教員が近くに居ることや少し手助けをしてくれることで安定して活動する姿がみられる。また、朝の出会いの中で教員や友達とのかかわりを通して、自分を表出していく。こうした積重ねが心の安定となり、教員や友達に心を開いていく。4歳児も5歳児の励ましで、自分でやってみようとする気持ちを持ち、それぞれにボタン留めができるようになった。中には、『自分でする』といって拒む4歳児の姿がみられた。自分でしようとする気持ちを受け止め、支援しながら、手助けをしようとした5歳児の気持ちも伝えていった。個々の意識の違いが感じられる中、教員は、互いに自分の思いを主張することを受け止め、相手の気持ちを知る機会となるよう双方をつないでいくよう努めた。

5歳児にとっては、4歳児を待つことが多かったが、自分との発達の違いを知り、年長者としての在り方、つまり年少者を思いやる気持ちが芽生えていった。4歳児にとっても年長児のやさしさにふれ、親しみや憧れの気持ちを抱くなど双方に豊かな心情が感じられた。

「いらんもん」・「じゃんけんはやめて！」－K児とT児の姿を通じて－

○幼児の姿 4歳児 5、6月

曲に合わせて歩いたり、走ったりするなど、友達と一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむようになった。そんな中、「いらんもん」「じゃんけんはやめて！」と言って、活動に参加しにくいK児とT児の姿がみられた。K児は、じゃんけん遊びを通して友達とふれ合うという活動に恥ずかしさを感じ、遊びに参加せずにいた。また、T児は、じゃんけん遊びをすることを嫌がり、「じゃんけんはやめて！」と参加しにくくなった。

それぞれの思いをとらえながら、時々じゃんけん遊びや簡単なふれ合い遊びをいろいろと取り入れる中でそれぞれの幼児の姿を見守ることにした。

しばらくK児は教員や友達の遊ぶ様子を見るのが続いたが、K児は、『むっくりクマさん』で鬼役の教員に追いかけることを喜び、歓声をあげながら逃げ回る姿がみられた。そして、自ら「クマしたい」といって遊びに参加する姿がみられるようになった。

T児は、友達の様子を見たり、家庭で母親や祖母らとじゃんけんをしたりすることを通して、じゃんけんの勝ち負けより、相手とのふれ合いが楽しくなり、次第に勝ち負けにこだわらないようになっていった。あるとき、友達が「Tちゃん、つよいねんなあ」と言ってくれたことがうれしく、自分から「じゃんけんしよう」と相手を誘う姿がみられるようになった。

○考察

K児は、教員に追いかけて遊ぶことを楽しんだり、友達と一緒にふれ合って遊んだりしたことを通して、「おもしろい」「自分もやってみたい」と心を揺り動かし、自ら全身でその遊びの楽しさ、おもしろさを味わっていった。このことは、次の遊びに対しても期待感を持ち、主体的に活動する姿につながっていったと思われる。

T児は、じゃんけんでは負けること、つまり自分は弱いとされることに抵抗を感じていた。友達や教員、母親や祖母も負けたり、勝ったりする場面を見ながら、負けたら悔しい、勝ったらうれしいという自分の気持ちと重ね合わせ、改めてじゃんけんのおもしろさを感じながら自らやってみようとする気持ちにつながっていったと思われる。T児にとっては、特に友達に「Tちゃん、つよいね」と認めてもらったことは、大きな自信となり、じゃんけん遊びを思い切り楽しむようになった。また、更にその友達への親しみの気持ちが増し、自ら友達を遊びに誘う姿がみられるようになっていった。

イ 自然体験、動植物とのかかわりから

- 自然の美しさや不思議さなどに触れることで、発見する楽しさや感じとる心、また、親しみや命を尊ぶ心がはぐくまれていく。

「きもちわるい!…きもちいい!」 4、5歳児 5月下旬

○幼児の姿

地域の田んぼには、苗が植わり、かえるの鳴き声がにぎやかに聞こえる。休みの日におたまじゃくしやかえるをみつけたことを教員や友達に話をする姿がみられるようになった。幼児の興味関心を大切にし、おたまじゃくしやかえるとの出会いを求めて園外保育を計画する。

○ねらい

- ・田んぼにいる小動物に興味や関心をもつ。
- ・おたまじゃくしやかえるなどの飼育を通して、小動物に親しみの気持ちをもつ。

○園外保育に出かけての幼児の姿

田んぼへ行き、網を持っておたまじゃくしやかえるを探すが、思うように捕まえることができず、「とれへん!」「せんせい、とって!」と叫ぶ幼児の姿がみられた。「ここにいるよ」と田んぼに手を差しのべ、「ほら、大きいおたまじゃくし。田んぼの水、あったかいよ」と言いながら、手のひらにおたまじゃくしを乗せて幼児に見せた。その様子を見ていたM児は、田んぼに足をはめてしまった。「わあー、足抜けへん!」「きもちわるい!」とM児。泥んこになったことを嫌がるM児であったが、「こうして泥落としてごらん」と言って田んぼに手をつけ、汚れを落とすように教員が促すと「わあー、きもちいい、水あったかい!」とM児は歓声をあげ、顔をほころばせていた。そのM児の歓声を聞き、周りの幼児たちも、田んぼに手をつけ、「ほんまや、あったかい」と、田んぼの水の感触、泥の感触を肌で感じていった。

そして、「あったかいからおたまじゃくしおっきいのかあ」とつぶやき、「ほんとやねえ」と教員も共感した。幼児たちは、近くに現れたおたまじゃくしを手のひらですくおうとし、手のひらに乗ったおたまじゃくしの感触を「わあー、こそばい!」「動いてる!」と声をあげて喜んでいった。

田んぼから園に持ち帰ったおたまじゃくしを飼育する際、「あったかいところにおいたらなあかん」と意見を言う幼児がいた。教員は、その意見を周りの幼児に知らせ、みんなで相談しながらテラスの日の当たるところにタライを置くことにした。登園すると「おはよう」「元気にしてるかな」とおたまじゃくしやかえるの様子を見る姿があった。数日後、自分たちの田んぼの水や苗の様子を見に行き、「私らの田んぼもあったかいな」「おたまじゃくし、ここに入れたったらいいなあ」と話す姿がみられた。その考えを教員と一緒に周りの幼児に知らせ、みんなで、おたまじゃくしを自分たちの田んぼに放した。

○考察

田んぼに出かけ、かえるやおたまじゃくしを目の前にしながらも、どのようにして触れたらよ

いのか分からずに立ちつくす姿がみられた。教員の姿を見ることやM児が田んぼに足を滑らせた偶発的な出来事から、田んぼの水や土に触れる機会が生まれ、おたまじゃくしやかえるを素手で捕まえる体験につながった。また、おたまじゃくしにとって生活しやすい環境を、体験を通して肌で感じとることができた。かえるの飼育を通して、かえるの死に直面することもあった。そんなとき幼児は、「なぜ、かえるが死んでしまったのか」と悲しんだり、死んだかえるを前にしながら「足びーんとしてる」「ぎゅってもったからかな…」と話したりしながら、自分たちのかかわり方を反省する姿もみられた。

ウ 地域の人とのかかわりから

未就園児との交流、保育所・小・中学校との交流、長寿会との交流、地域行事への参加と情報発信

- 地域の様々な人とのかかわりを通して、心を動かしたり、親しみや感謝の気持ちをもったりする体験を積み重ね、豊かな心をはぐくむ。

○未就園児登園日…毎週一回・0歳～入園前の乳幼児が親子で登園する。少人数のよさを生かし、在園児と未就園児とがふれ合い一緒に活動することを通して、互いに親しみをもったり、かかわり方を学んだりする。調和のとれた人的環境として保育内容の創造に努める。(研究保育)

「○○ちゃん、来やった」 4、5歳児 1学期

○未就園児登園日の幼児の姿

未就園児登園日の朝は、「○○ちゃん、来やった」と出迎え、挨拶を交わす。また、「○○ちゃんと遊んでくる」と一緒に遊ぶことを楽しみにしている様子が窺え、「赤ちゃんて、かわいい」「私も小さいとき、かわいかってんて。お母さん言うてたもん」と言いながら0歳児の手を触ったり、頭を撫でたり、授乳される母子の様子をそっと見守ったりする姿もみられた。教員は、幼児たちが、親しみの気持ちをもってかかわる姿を大切に見守り、ともに親しみの気持ちやいたわりの気持ちをもってかかわっていった。その中で、在園児には、年長者としてのかかわり方を促し、思いやりをもって接する姿を認めたり、周りの幼児にも知らせたりしながらより豊かなかかわりができるよう支援していった。

「○○ちゃん、泣いてる」 4、5歳児 2学期

廊下から泣き声が聞こえてくると遊びの手を止めて、「だれか泣いてる。見てくる」、「○○ちゃんや」などと言いながら様子を見に行き、面倒をみたり、大人に助けを求めたりするようになった。また、一緒に遊びながら、「これほしかったんかあ」「私らと同じことしたかってんなあ」と相手のことを思いやり、やさしく、また少し誇らしげに年長者ぶりを発揮してかかわる姿もみられるようになった。

○考察

園児は、未就園児との交流を通して年少者を思いやったり、親切にしたりするようになった。未就園児も在園児と一緒に遊び、活動したい様子が窺えた。在園児は、年少者への思いやりや責任感を培い、また未就園児は、年長者への憧れや自分も同じようにしようとする意欲につながるよう交流を進めていった。未就園児の保護者にとっては安らぎの場となり、子育てや家庭生活のしんどさや工夫などを保護者同士で交流する場となっている。地域の保護者同士をつなぎ、豊かな心をはぐくむための家庭教育支援につながってほしい。0～3歳児、3、4、5歳児とのかかわりということで一緒に活動するには、発達の違いもあり、活動内容も限られているが、未就園児と在園児が共に主体的にかかわれるような配慮をしていった。(研究保育を通して)

5 研究結果と考察

- (1) 少人数ということもあり、教員は、一人一人の幼児に丁寧にかかわることができるが、幼児にとって集団生活の規律を守る体験や自己調整する体験ができていくので、異年齢保育の取組を進めている。3、4、5歳児の異年齢保育の中では、発達段階に個人差がみられ、互に通じ合いにくいところもあったが、日々の生活を通して、次第に自分の立場や相手の立場を思いやりかかわる姿が見受けられるようになってきている。友達の一言や友達とともに活動したことが喜びや自信となって、主体的に環境にかかわり、活動していく姿がみられる。教員は、幼児のつぶやきや仕草、表情、まなざしなどからその時の幼児の内面にある心情・意欲を読み取り、その場に応じた適切な援助をする必要がある。一人一人の幼児をよく理解するためにも教員間の連携を密にし、多面的に幼児をとらえることが大切である。教員は幼児同士をつないでいく重要な人的環境であることを改めて認識した。
- (2) 幼児は、日々、様々な動植物との出会いを通して、興味・関心をもって主体的にかかわっていきこうとする姿がみられた。それらにかかわることで親しみの気持ちを持ち、喜んだり悲しんだり、「なぜだろう」と不思議に思ったりする。そのような思いや感動を教員や友達と一緒に味わうことで、感動はより確かなものとなり、新しい好奇心の芽生えとなり、探求したくなる気持ちにつながったと思う。また、幼児の心を揺り動かす感動体験は幼児たちの感性を刺激し、豊かな表現力、発想を生み出していく。幼児の心の高まりを察知し、そのときの幼児の心情や意欲、態度を認め、周りの幼児に知らせるなど、タイミングを逃さない教員の援助が必要である。
- (3) 地域の方々との交流を通して、相手の優しさやぬくもりを感じたり、憧れや感謝の気持ちを抱いたり、思いやりやいたわりの気持ちをもってかかわったりするなど、豊かな心をはぐくまれていく感じが感じとれた。同年齢の限られたかかわりの育ちだけでなく、異校種、異年齢とのかかわりは、幼児の感性に訴える幅を広げ、自己調整力や思いやりの気持ちを育てていくように思われる。こうした日々の生活経験を積み重ねることによって、人と接するかかわり方を学んでいくと思われる。
- (4) 幼児の生活は、家庭を基盤として幼稚園、地域社会へと広がりをもつものであることを留意し、幼児の生活全体を視野に入れ、興味・関心や必要な経験などを的確にとらえ、適当な環境を構成し、その生活を充実したものにすることが重要である。また、子育てについて家庭との連携を十分とるためには、まず、保護者と園との信頼関係を築き、子育てについての思いを話し合いながら、同じ方向で子育てができるようにしなければならない。園や担任が一方的に子育ての思いを伝えるだけでなく、機会をとらえて気軽に話し合える雰囲気をつくり、保育参観、親子活動等の園行事を通して、子どもの遊びや生活、ものの見方や感じ方などの理解を得るようにした。このように幼稚園と家庭とが互いに幼児の望ましい発達を促すことで、豊かな心をはぐくむための生活を実現していくことができるのではないだろうか。

6 今後の課題

「豊かな心をはぐくむ」ための幼児の内面理解や発達課題に即した援助の在り方を、更に追究する。

参考文献

- | | | | |
|-----------|--------------|--------|------|
| (1) 文部省 | 幼稚園教育要領解説 | フレーベル館 | 平11 |
| (2) 神長美津子 | 初等教育資料4月号 | 東洋館出版社 | 平16 |
| (3) 山口茂嘉 | 保育とカリキュラム1月号 | ひかりのくに | 2003 |